

## オープン カレッジ

10月上旬のビッグニュースと言えはノーベル賞の発表。そのままで世界的ではないにせよ、学術、文芸、スポーツなど各分野の顕著な業績や作品に対して贈られる素晴らしい賞は多々ある。日本の放送界の代表的な賞の一つである放送文化基金賞は、テレビ、ラジオの過去1年間の優れた番組に加え、放送文化や放送技術の発展と向上に寄与した個人・グループも対象とする。今年は法曹界から初の受賞が決まり、注目された。受賞者は弁護士の川端和治(よしはる)氏。氏はテ

### フェイクニュースの時代に

権侵害などを指摘された特定番組の取材の在り方や構成、コメントなどを審議し、結果を委員会決定として公表する。氏の手がけた案件は28、ワイドショーからニュースに至るまで多岐にわたっている。

そもそもBPO自体、テレビ界を中心に放送倫理の問題を積極的に考え、視聴者との信頼関係の強化を目指すとうと、NHKと日本民間放送連盟が放送体制の違いを乗り越えて2003年に設立した組織だ。独立した第三者機関としての位置付けは、放送、ひいては表現の自由という戦後日本の民主主義の根幹を守ろうとする放送人たちの決意が反映されたものである。と同時に、マスメディアの中で

書を上梓した。簡潔なタイトルとはうらはらに、自由と公共性という放送の本来あるべき姿を問う、非常に重い課題を具体的に論じ、テレビ界への置き土産として、公権力から独立する中で真実を伝え、表現の自由を守るこそが、通信との融合が進む時代にあってもなお、放送が生き残る道だと論理的に実証した。

東京で行われた授賞式は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため受賞者ら関係者のみの参加、祝賀パーティーも中止されたが、放送メディアを愛する信念を励みに、それぞれの道でプロとして邁進する仕事ぶりが報われた受賞者の表情は一樣に晴れやかだった。川端氏が「真実を伝える放送倫理はポストトゥルースといわれるこの時代にあっても、なお、変わることのない意義を持っている」と挨拶すると、式場が真剣に聞き入っていたのが印象に残った。氏の言葉は、フェイクニュースが氾濫する今の世の中がむしろ放送界にとって大きなチャンスではないかと語っている。

# テレビ界の 重責にエール

テレビ番組のねつ造で社会的批判が高まった2007年に「放送倫理・番組向上機構(BPO)」に新設された「放送倫理検証委員会」の委員長を発足から11年間務めた。委員会は虚偽や人



大学大学院  
文化情報学部教授  
檀山女学

協田 泰子

唯一、法による規制のある放送に権力が介入することを決して許さず、あくまで「自主・自律」によって放送の在り方を考えようという意思の表明でもある。現在、リアリティ番組で全く異なる人格に描かれ、SNS上で受けた誹謗中傷を苦に自ら命を絶ったとする出演者遺族からの申し立ての審理入りが決まっている。

川端氏は、BPO時代の経験的背景に退任翌年の2019年「放送の自由―その公共性を問う」という新

わきた・やすこ シャーナリズ  
ム論、メディア論。東京大学教養  
学部教養学科。